宿場町
ひらかた

第９５号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　上谷　勝己
枚方市船橋本町2-87-7
072-857-2995
編 集 広報委員会

惟喬親王ゆかりの
鷹塚山碑が移転

本会は平成27年1月、枚方市長に対し、鷹塚山配水場（枚方市高塚町）の奥にある「鷹塚山碑」を見やすい場所へ移転するよう要望しました。本号の第88号では、「平成32年（令和２年）には移転する予定」と掲載、移転は完了しましたが、新型コロナ感染症のため、本会が一時的に休会同然となり、結果をお伝えできず今日に至りました。改めて現状を報告します。

「鷹塚山碑」は、平安時代の前期、交野が原で遊猟した惟喬親王（文徳天皇第一皇子）が、死んだ愛鷹をこの地に埋めたという伝承により、約１００年前に建てられたものです。写真としては、昭和６年（１９３１年）に秩父宮親王と同妃殿下が枚方の万里荘にご滞在されたとき、枚方名所を紹介するために撮られた写真の中に残っています。

約100年前の写真

本会としては、渚院（枚方市渚元町）を始め、惟喬親王伝承の名所の一つとして、碑を見やすい道路際に移設するよう要望していたものです。

配水場外に移設

場内にあり、外から見にくい（H26年）

主な内容

○ 鷹塚山碑が移転（1頁）
○ 東海道シンポジウム亀山宿大会（2頁～3頁）
○ 尊延寺地域を再訪（4頁～6頁）
○ 禁野火薬庫大爆発　大きな経験（7頁）
○ 大塩中斎の顕彰碑（8頁～10頁）
○ 門真市資料館でバッタリを発見（11頁～12頁）

東海道シンポジウム亀山宿大会

関宿の街並みも訪ねる

脇本初美　河野不二夫　松山正之

関は古代から交通の要衝として、古代三関の一つ「鈴鹿関」が置かれていたところです。関の名もこの鈴鹿関に由来しています。

江戸時代には、東海道五十七次の江戸から数えて47番目の宿場町として、参勤交代や伊勢参りの人々などでにぎわいました。現在、旧東海道の宿場町のほとんどが旧態をとどめない中にあって、唯一歴史的な街並みが残ることから、昭和59年、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されました。

関宿の街並み

私たちは関宿案内ボランティアさんのガイドで、高札場跡(現関郵便局)、江戸時代に栄えた関宿を代表する旅籠の一つで歴史資料館となっている「玉屋」、夏の風物詩「関宿祇園祭り」の山車2基を常設展示する資料館「関の山車(やま)会館」、ずらりと並ぶ関宿の街並みが見られる百六里庭(眺関亭)、伝統的な町屋を公開した「関まちなみ資料館」などを見学しました。

関宿高札場

江戸時代から明治時代までにかけて建てられた古い町並み２００件余りが現在まで、ほぼそのまま残っていること、また歴史を生かしながら、そこが「生活の場」として機能していることに「宿場町枚方を考える会」の会員として感心しました。これは国や市の力だけでなく、地元のまちなみ・まつり山車保存会の文化・伝統に対する高い住民意識に支えられているという

とでした。まちなみの保存は決して終りがありません。永遠に保全・修復に努めなければないのです。先人たちが残してくれた遺産をいかにして後世に伝えていくのか、どこの地区においても課題が山積していますが、これからも他の宿場町の模範となっていただきたいと思いました。

第34回東海道シンポジウム亀山宿大会は、令和4年11月26日の午後から亀山市文化会館で行われました。先ず心形刀流保存赤心会による三重県指定無形文化財「亀山藩御流儀　心形刀流武芸形」が披露されました。

心形刀流という名の由来は「まず心の正しい人間になることが第一の目標であり、技(刀)が上達することは第二の目標である。心が正しければ技(刀)も正しく、心が乱れれば技も乱れ、それがそのまま刀に表れる」という考えに基づくものだそうです。組太刀「大太刀の形」「小太刀の形」「二刀の形」など見事な演武が披露されました。

心形刀流武芸形

続いて名城大学名誉教授谷口昭氏による基調講演「旅する領主家中―亀山藩の場合転封(てんぽう)を軸として…」、「転封」とは、所替、領地替、国替のこと。国替は知っていましたが、「転封」という言葉も徳川の時代に亀山藩では石川氏の封入(土地が与えられ、その領地に入ること)以来、板倉、松平、再び板倉、再び石川と領主が替わっているように、度々「転封」が行われていたとは知りませんでした。

講演内容は、それぞれの「転封」の様子を資料で紐解いていくものでしたが、「転封」は余程領主に不都合があった場合にのみ行われる、稀であると認識していました。しかし、理由は、①懲罰と恩恵②行政転封③交換転封④三方領地替⑤連鎖転封と多種多様であり、幕府の都合で振り回されていたということでした。

講演の後、各宿場町の紹介と、次回シンポジウムの当番宿である川崎宿から２０２３年東海道シンポジウムの予告がありました。皆さんそれぞれの宿場町に非常に愛着深く、まちづくりに積極的に取り組んでおられる方ばかりでした。

その中で、「御宿場印」(寺や神社の御朱印のようなもの)をすでに作成している宿場町から、その紹介と各宿場町への取り組みの呼びかけがあり、枚方もこれに賛同して取り組んではどうでしょうか。そして、東海道五十七次を定着させるために、伏見宿、淀宿、守口宿にも呼びかけて、「五十七次御宿場印」の提案をしたいと思います。

「御宿場印」

近郊を歩く会

尊延寺地域を再訪

三栗　石川　勲

令和４年度の「近郊を歩く会」は、春の「寝屋川市の史跡を訪ねる」に続き、秋は枚方市内の「尊延寺地域」を訪ねました。

本来、11月13日の予定でしたが、延期要件である「降雨確率50％以上」のため19日に順延となりました。実はこの「尊延寺地域」、平成28年の９月にも実施しており、本会としては７年ぶりの訪問となりました。前回同様、最初に向ったのは、地域の地名にもなっている尊延寺（そんえんじ／尊延寺６丁目）です。

尊延寺

尊延寺は、聖武天皇の勅願により天平３年（７３１年）、奈良興福寺の宣教大師が創建したと伝えられています。現在は高野山真言宗のお寺で、本堂となっている不動堂には、ご本尊の不動明王を始めとする五大力明王（ごだいりきみょうおう）と、幼子のような顔をされた地蔵菩薩が安置されています。

不動堂

不動明王（後方）と地蔵菩薩

五大力明王は平成16年４月１日に枚方市の有形文化財に指定されていましたが、うち軍荼利明王（ぐんだりみょうおう）と降三世明王（ごう

ざんぜみょうおう）の二躯は平成28年8月17日に国の重要文化財に指定されました。

←降三世明王　←軍荼利明王

大塩中斎遺跡碑

尊延寺の次は「大塩中斎遺跡碑（尊延寺2丁目）」を訪ねました。大塩中斎とは、大塩事件（大塩の乱）」を起こした大塩平八郎のことです。

中斎遺跡の説明中（碑の写真は８頁）

大塩事件はご存知の通り、天保8年（1837年）に元大坂東町奉行所の与力であり、陽明学者であった大塩が飢饉に苦しむ民衆の救済などを訴え決起した事件です。大塩の門弟だった尊延寺（河内国交野郡尊延寺村）の深尾才次郎は、大塩に加勢するため鉄砲などの武器を携え、村民数十人を率いて大坂に向いました。しかし、守口宿に到着すると、大塩が幕府方に敗れたと知り、村民に帰村するよう伝えた後、逃亡しました。結果的に才次郎は加賀国で自決しています。

才次郎の兄、治兵衛は大坂で大塩の一行に加わりましたが、途中、帰村してから大坂町奉行に自訴し、獄死しています。

「大塩中斎遺跡碑」は、かつて庄屋であった深尾家の近くにある治兵衛・才次郎兄弟の屋敷跡（俗称大塩屋敷跡）にあります。碑の表には「大塩中斎遺跡」、裏には「昭和47年6月21日深尾家建立」と刻まれています。

来雲寺

続いて来雲寺（らいうんじ／尊延寺5丁目）を訪問しました。「大塩中斎遺跡碑」からは約400m余り、国道307号を横断する必要があります。「大塩事件」に尊延寺村から参加した14人の記録が過去帳に記載されています。

来雲寺山門

創建は天平時代で、宣教大師による旧尊延寺46院の一つとして創基されました。

その後、守口市佐太中町にある来迎寺（融通念仏宗佐太派、現在は浄土宗）の末寺と

なり、さらに現在の浄土宗に改宗しています。ご本尊は阿弥陀如来です。

本尊 阿弥陀如来坐像

本堂に向って左側に大日如来の石像と2基の十三仏石板碑があります。十三仏とは、初七日から三十三回忌に至る13回の供養をつかさどる仏、板碑はその仏を浮き彫りにした石碑のことで、亡くなった人の冥福や追善だけでなく、生きている自分自身の法要を生前に行う「逆修（ぎゃくしゅう）」もあります。十三仏信仰は室町時代に始まったといわれています。

来雲寺 十三仏石板碑

正面左側、少し大きい方、高さは約85㎝、慶長16年（1611年）の造立。右側は永禄元年（1558年）の造立です。枚方市内に十三仏石板碑が残っているのはここだけだろうといわれています。

厳島神社

今回の「近郊を歩く会」の最後の訪問は厳島神社（いつくしまじんじゃ／尊延寺5丁目）です。来雲寺とは道路一つ挟んだところにあります。海上を守護する厳島神社は全国に約500社あるといわれ、総本社は宮島にある厳島神社（広島県廿日市市）です。

尊延寺にある厳島神社の創建は、平安時代の末期または鎌倉時代といわれ、村の鎮守としての役目を担っていました。

現在の本殿は、文久3年（1863年）に奈良の春日大社から旧社殿を譲り受けたもので、従来の社殿は本殿の右側にある末社の春日神社本殿として移築されました。

春日神社の本殿となった厳島神社の旧社殿は、室町時代の建立と推定されています。京都府との境に近いため、大阪南部とは異なる手法があり、地域的特色を持つ中世の遺構として昭和53年に国の重要文化財に指定されています。末社なのに文化財的には、主役になった感があります。

春日神社本殿

厳島神社本殿

禁野火薬庫の大爆発

人生の大きな経験

宝塚市　北田 節子

前号の「火薬庫を設置」について、会員から執筆者へ感想文（礼状）が届きました。本文は、その内容を差出人および執筆者の了解を得て掲載したものです。編集の都合上、原文と異なる部分があります。写真は前号でも掲載したものです。

「宿場町ひらかた」第94号に禁野火薬庫の爆発のことを詳しく載せていただきありがとうございました。実は私はその被災者で、感無量の気持ちで読ませていただきました。

私の実家は、代々中宮に居住し、その日、ドカーンの大音響と同時に、家の障子が爆風で倒れ、廊下にパタンパタンと落ちてきました。三歳半だった私でも、そのことは今も覚えています。

両親は留守でしたが、子守の女性（千鶴子さん）は、兄と私を連れて、近所の方々と津田方面に逃げました。途中、後方から砲弾が道路横の田んぼに落ち、千鶴子さんは私たちをかばいながら小走りに逃げてくれました。

津田と火薬庫を結ぶ引込線跡

津田の手前の田んぼの地にテントが張られ、私たちはそこへ収容され、夕飯には炊き出しのおにぎりをいただきました。夕方、西の空（中宮方面）は異様に赤く、私が「こわい」というと、「あれは夕焼け」と安心させてくれました。翌日、両親に会ったのですが、覚えていません…。

住む家もない私どもは、枚方上之町の一戸建てに入り、家主さんはホリエさんだったと母が申しておりました。ひょっとしたら「堀家さん」なのかなと、不思議なご縁に驚いています。

思いのまま書きました。このことで文字にしたのは初めてです。私の人生のうち、大きな経験だったと思います。

中宮第三団地

山間の尊延寺に 大塩中斎の顕彰碑

交野市　堀家 啓男

尊延寺村から決起の幟

生駒山ろく、尊延寺村は枚方でも東部の少し奥まった山間（やまあい）にあります。穂谷川をさかのぼり、国道３０７号が京都府へ入る手前、バス停「槎谷橋」を降ります。進行方向左側の少し上った高台、集落を見渡せる畑地、ここが「大塩の乱」に加わった深尾才次郎が住んでいた屋敷跡です。この畑の端に「大塩中斎遺跡」碑（尊延寺２丁目）があります。

「大塩中斎遺跡」碑

この碑、封建時代を毀す（こわす）世直しのきっかけをつくった「大塩の乱」の大塩平八郎（号・中斎）とその門弟、才次郎を顕彰しています。小規模ながらきりっとしたすがすがしさを感じる碑です。

自由民権運動の「自由は土佐の山間より出づ」という植木枝盛の言葉を参考にするなら、太平の世を揺るがし「世直しは尊延寺の山間から出づ」とばかりに、墨痕あざやか「尊延寺村」の決起の幟が北河内の山間の地に立ったのです。

「大塩の乱」勃発

飢饉が続く、天保８年（１８３７）２月19日、時ならぬ、「浪速の花火」が打上がりました。午前８時頃、元大坂町奉行所与力、大塩平八郎らは大坂天満の自宅に火を放ち、邸の南の川崎東照宮と北隣の朝岡邸に大筒を打ち込んだのです。これが「大塩の乱」の勃発でした。

天満一帯を焼き、大筒を放ちながら南方向へ、参加者は七十余名。蜂起が当初予定の正午より早くなったのは、参加予定の武士の中から裏切りが出たためです。正午頃には大川に架かる難波橋を渡り、商人の町、船場に入り、鴻池や三井を焼き払います。今橋、高麗橋、平野橋などが焼失、大塩の檄文を見た農民も加わり、総数は三百人ほどになっていました。午後２時ごろ、東町奉行所などから追討隊が出馬、銃撃戦となり、大塩勢は百人程に減ります。午後４時頃、淡路町で最後の激戦を展開、大塩勢は総崩れとなり、散り散りに逃走、一日足らず

で乱は終結しました。

なぜか大塩は、息子格之助とともに捜査の目を潜り抜け、大坂周辺を逃げ続けます。決起二日前に自身が幕府要人らに送付した密書（建議書）によって、告発した大きな不正が暴露されることを待っていたともいわれます。しかし、残念ながらその密書は、幕閣より葬られました。内容が明らかになるのは、伊豆韮山の江川家文書から発見された密書の写しの研究過程という、現代になってからでした。

同3月27日、大塩父子は船場の靭油掛町（大阪市西区）で捕吏によって発見されます。二人は潜居していた五郎兵衛宅に火を放ち、自ら爆薬を括り（くくり）破裂させ自害します。花火のように夜空に咲き、一瞬に消滅したため、「浪速の花火」と称されたのです。

大塩平八郎
（大阪城天守閣蔵）

才次郎らの蜂起

この乱に参加しようと決意していたのが、尊延寺村の農民、深尾才次郎です。才次郎は兄治兵衛の家（深尾家表家／おもや）に同居し、天保2年（1831）に大塩の私塾洗心洞に入門していました。かねて恩師大塩から決起の日時を知らされ、檄文を渡されていた才次郎は、2月19日、正午の決起予定時刻を見計らい、治兵衛宅の半鐘を打ち鳴らします。半鐘を聞いて村人が集まります。尊延寺村のほか、隣村の杉、穂谷村から合わせて百人以上が集まりました。

当日、兄治兵衛は、事前に大塩から呼び出されて不在でした。在宅すれば、才次郎の蜂起に反対するであろうと予想したからとのこと。緻密な計画であったことがわかります。

才次郎は黄絹の袋から取り出した大塩の「四海こんきういたし候ハゝ天禄ながくたゝん…」の有名な「檄文」を見せ、村人に読み聞かせます。高名な儒学者である大塩の高弟で、大塩が勝利すれば、年貢などが減免されるという才次郎の言葉に、集まった村人は動かされます。さしあたりの手当三両ずつが配られ、才次郎の母のぶが用意した酒や牡丹餅がふるまわれました。

村役人らは、これを止めようとしますが、才次郎は笑いながら、「勝って帰村した折には挨拶に参上する」と言い残し、かねて用意の鉄砲六丁、竹やり十五本、高張提灯二張を持ち、白木綿に「尊延寺村」と墨書した幟を高く掲げ、大坂へ向かいました。総勢60人です。（参考資料、「大塩事件と深尾家について」深尾正著）

留守を預かった母のぶは「才次郎が成功すれば大名、失敗したら仕置き、今日の勝負次第」と警備に残った村人数人に言ったそうです。才次郎ら一行は枚方宿を経由し、暮れ六つ時（午後6時）頃、守口宿の同志白井孝右衛門宅に至ります。ここで才次郎は、孝右衛門の息子から、大塩は早朝すでに挙兵し、敗れて逃走したことを知らされます。遅かったのです。才次郎は村人に大塩が敗れたことを知らせ、村に帰るよう促します。その後、才次郎は能登方面まで逃げ、羽咋の福浦村（現在

の志賀町）の船宿で逃げ切れぬと判断し自害します。遺骸は加賀藩の手によって塩漬けにされ江戸に送られました。翌天保９年（１８３８）８月、裁決が下り、才次郎らは死罪とされます。９月18日、乱の再発を恐れた幕府の手により、見せしめのため塩詰めされていた大塩父子、才次郎ら門弟の遺骸とともに大坂市中引き回しの上、磔、３日間、飛田で晒されました。「大塩の乱首謀者磔の図」によると19人が２列で執行され、後列左端の人物に「尊延寺村才次郎」と記入されています。（参考図書、「枚方市史別巻」）

この処刑の様子を書き留めていたのが、枚方、中振村の庄屋、畠山武兵衛です。日記に「十八日、極天気、早朝より伊兵衛連れ、出坂いたし、大塩一条御仕置在之、見物いたし、江戸屋にて一宿いたし候」と記し、大塩事件に深く関心を持ち、見物に出かけたようで、「大塩の乱」は周辺の関心を呼んでいたようです。

なお、才次郎の兄治兵衛は、蜂起後、同行しますが、途中、難波橋で抜け出て帰村します。しかし、義兄の庄屋治五平（深尾家本家　ほんけ）に付き添われて、船橋村にあった尊延寺村の領主永井家陣屋に出頭した後、大坂町奉行所に自訴、取り調べ中に獄死します。死骸は取り捨て、田畑、屋敷の闕所とされ、母のぶも奉行所内で獄死しています。のぶは計画を才次郎から聞き、協力したと判断されたようです。参加した村人は、引き回しの上獄門２名、摂津河内国構い２名、所払い２名、重追放２名、敲き97名、三十日押し込み１名、叱り２名と、処分は重く、村全体に及びました。深尾家の菩提寺「来雲寺」の過去帳には、関係者14名の村人の名前があるそうです。

才次郎の治兵衛家は明治になって、治兵衛の子、正太郎が再興を認められますが、昭和期に子孫が絶え、正太郎屋敷跡は畑となり、中斎顕彰碑がこの地に建立されます。

親戚である庄屋治五平は決起を阻止しようとしたが、家に火をつけると脅され、これがならず、直ちに領主らに報告し、事態の収拾に努めました。治五平は急度（きっと）叱という比較的軽い処分ですんでいます。なお、治五平家を継いだ治郎八の次男として尊延寺に生まれた深尾龍三（りょうぞう）は、明治の民権運動にかかわっていたようで、氷室村の村長を経て第五回総選挙（明治31年３月１８９８年）で当選、枚方市内初の代議士となります。再選されるも第七回総選挙で落選しました。龍三は直ちに北海道に渡り、明治36年（１９０３）２月、２代目根室町長に当選、根室実業学校（現根室高校）の誘致など、教育振興に努めたようですが、在職中の明治40年２月、京都で病死します。

町では顕彰碑を建立する予定だったようですが、妻がその費用は学校に役立ててほしいと断ったといいます。後に根室で大火があり、根室にゆかりのない龍三がなぜ遠い道東に渡ったのかは謎のままです。北海道発展の礎たらんとしたのか、才次郎とよく似た正義漢だったのでしょう。

なお、明治になって才次郎と母のぶの墓が向かいの山の中腹、深尾家の墓地内に建てられました。

門真市立歴史資料館で
バッタリを発見

小倉東町　平良一郎

たまたま通りがかりに門真市立歴史資料館を見学する機会がありました。

門真市立歴史資料館

京阪電車門真市駅から徒歩圏内の立地。事務所には職員が一人座っているだけで、訪れる人も多くはないようです。館内には、門真市の歴史と若干の民具が展示され、門真出身の元首相幣原喜重郎の紹介コーナーがあります。当初は興味をそそられるものがなかったのですが、目を引かれたものがありました。それが「バッタリ」です。

門真市は大阪府下有数の低湿地帯で、いわば大阪平野の中で、すり鉢の底のような地形です。昔から水害と排水の対策が最大の課題で、水との格闘の歴史です。明治になってから、その低湿地帯を利用して、れんこん栽培を始めました。

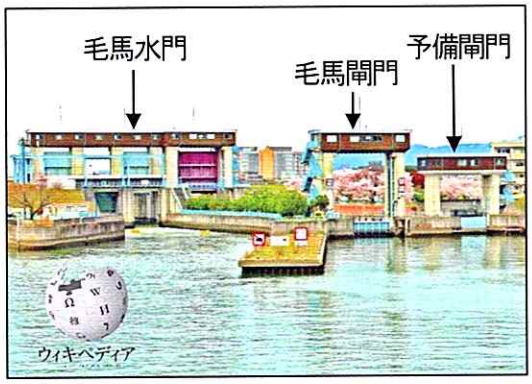
「門真れんこん」として、その作付面積は大阪府の九割以上を占めるほど盛んになり、れんこん畑の中を細い水路が網の目のように巡らされました。れんこんの収穫には、その水路を利用し、小さな四角い舟（田舟）が使われていました。水路の高低差を解消するためにバッタリが利用されたのです。

バッタリは、用水の取り入れや排水の水門ではありません。水路には落差があり、一度に下流へ水が流れないように、二つの水門を互いに操作すると、舟を通す役割を果たします。水門を開けた時に「バタリ」と音がした事から「バッタリ」と呼ばれるようになったようです。これは小学校のときの授業で習ったパナマ運河の仕組みと同じです。

パナマ運河はアメリカ政府によって1914年（大正3年）に造られたもので、「結んでいる太平洋と大西洋との間に26ｍの水位差があり、これを解消するために考えられた仕組みである」と習いました。仕組みはアメリカ人の発

明だということでした。「アメリカ人はたいしたものだ」。当時、終戦間もない日本は、アメリカ一辺倒の時代だったので、先生のことばは納得できるものでした。

水位差を解消するための設備は、日本語で「閘門（こうもん）」、英語で「ロック（LOCK）」と呼ばれるもので、昔から世界中にあります。日本では門真の「バッタリ」や大阪市都島区の「毛馬の閘門」を含め多く現存しています。



「毛馬の閘門」は、淀川と大川との水位差を調整するために使われていて、大阪水上バス「アクアライナー」が定期的にここを通過しています。

それにパナマ運河の設計は、アメリカ人だけではありません。ガツン閘門の設計は、日本人技師青山士（あおやまあきら）も担当しています。さらに、パナマ運河の水位差の26メートルは、太平洋と大西洋との差ではありません。海の水位には高低差はなく、途中に通過するガツン湖が海面の水位よりも高いのです。

パナマ運河については、太平洋と大西洋とに水位差があるのだと誤解している人が多いようです。大きな期待もせずに訪れた歴史資料館で思わぬ収穫がありました。

機関誌の文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありますが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

新会員紹介

堀田香代子さん　高田

会員募集中

本会ホームページからも入会できます。

ホームページを開設しています

本会をよりご理解、ご賛同をいただくため、事業内容、入会案内などを掲載しています。

ＨＰ　https://syukubamachi・hirakata.com

宿場町枚方を考える会